

LNG 産消会議 2016 に参加して

一般財団法人 日本エネルギー経済研究所
常務理事 首席研究員
小山 堅

11 月 24 日、新高輪グランドプリンスホテルにおいて、「LNG 産消会議 2016」が開催された。この会議は、2012 年の第 1 回会合以降、毎年開催され、今回で 5 回目の会合となる。会議の主催者は、経済産業省とアジア太平洋エネルギー研究センターであり、今回の会議には登録ベースで約 1000 名の参加者が参集する大規模会議となった。今回は、開会挨拶を行った世耕・経済産業大臣、アル・サダ・カタール国エネルギー工業大臣を始め、LNG 産消国から 12 名のエネルギー大臣級の参加者があり、加えて多数の LNG 産業のトップマネジメント、世界的な LNG 問題等の専門家・有識者等、がスピーカーやモデレーターとして参加、6 つのセッションで活発な議論が行われた。以下では、今回の会議で筆者にとって特に印象に残ったポイントを整理する。

第 1 に、世界の、そしてアジアの LNG 市場の現状と当面の将来について、会議参加者の共通認識として供給過剰問題が明確に共有されていた点を挙げたい。第 1 回の LNG 産消会議以降、第 3 回会合までは、LNG 消費国側が将来の LNG 需給の緩和を予想する見方を取ってきたことに対して、供給国・供給者側は、供給過剰の存在や可能性を否定・疑問視する声を上げることがしばしばあった。その点では、市場認識そのものに、産消双方で大きな隔たりがあったと言える。しかしその状況は、昨年の会合から様変わりし始め、今回の会合では、今の状況が供給過剰であること、2020 年頃までは供給過剰が続く見通しであることが参加者の明確な共通認識であることが示された。特に、供給国・供給者の代表によるスピーチにおいても、供給過剰問題が率直に言及されたことに時代・市場の変化を強く感じるようになった。

供給過剰問題に関しては、2020 年までに、米国・豪州等の LNG プロジェクトが立ち上がり、LNG 液化（供給）能力が 1 億トン以上追加されることが必至であるため、LNG 市場で供給過剰が続くこと、場合によっては過剰状況が加速化する見通しが様々なスピーチを通して示された。需要増加のテンポ等によっては、この状況は 2020 年を超えて数年続く可能性も示されている。今回の会議は、こうした現状と当面の供給過剰を共通認識として、そこから浮上・派生する、あるいは関連する問題にどう対応するか、が最も重要な議論の中心課題になったと言える。

足下の供給過剰と低価格が引き起こしうる将来の問題として、将来時点でのあるタイミングにおける供給不足と需給逼迫の懸念がある。既に投資決定が為され、建設途上であり供給力化が確実なプロジェクトが当面の供給過剰をもたらすが、その反面、供給過剰と LNG 価格の低下で、新規案件の投資決定は全く進まなくなるという「影の側面」が顕在化している。その結果、2020 年を超えたどこかのタイミングで、今起きている投資不足が供給能力の拡大を妨げ、需要増加に対応できず、市場の状況が過剰から不足へと一気に転換する

可能性がある。この点は、「谷深ければ山高し」ということであり、現在は供給過剰で買手市場のため供給国が厳しい状況に置かれているが、上述の市場の反転で将来は消費国が厳しい状況に置かれるかもしれない、かつその状況は今の「谷」が深いほど反動は大きくなる恐れもある。こうした、市場が極端から極端に振れることは、最終的には誰にとっても決して望ましいことではない。エネルギー市場は常に変動し、サイクル性を持つものであるが、今回の会議では、現在の供給過剰がもたらしうる将来課題を産消双方が意識し、議論を行ったともいえる。

第 2 に、産消双方の共通課題として、特にアジアの LNG 市場をより発展させるためには何が必要か、という論点があった。現在の供給過剰問題の背景には、前述した LNG 供給量の大幅な拡大に加え、LNG 需要が期待されたほどには大きく伸びていない、という問題もある。化石燃料の中で CO2 排出が最小などクリーン燃料であること、かつ優れた供給安定性や豊富な資源・供給ポテンシャルの存在等の優位性を裏打ちに、天然ガス、そして LNG が世界・アジアのエネルギーミックスの中でより大きな役割を果たすことへの期待は高い。IEA の長期見通しでも、世界の国際ガス貿易の中で LNG が占めるシェアは 2000 年の 26% から 2040 年には 53% と、過半を占めるまでに成長する、との見通しが示されている。

しかし、同時に、LNG は、特にアジアでは石炭、また欧州では再生可能エネルギーという強力な競合エネルギーがあり、将来の需要拡大のペースには様々な不確実性が存在する。また、「パリ協定」発効を踏まえ、世界の低炭素化への取り組みがガス・LNG 需要の将来にどう影響するか、も新たな不透明要素となっている。その状況下、今回の会議では、LNG の「総合的な競争力」をどう高めるかが市場発展の鍵、という議論が行われた。

競争力という場合、最も狭義には、競合するエネルギーとの価格競争力が問題となる。もちろん、価格競争力が重要であることは間違いないが、LNG がエネルギーとして選択されていくためには、それだけにとどまらず、変化しつつある市場状況に対応する柔軟性や利便性など全体としての「魅力度」が重要となる。今回の会議では、特に消費国・ユーザー側が、LNG 供給の柔軟性や市場流動性向上の重要性を指摘したのに対し、供給側からも市場の変化・消費側のニーズに対応することの大事さを意識した意見が大きく聞かれた。その点、産消双方の取組みで、LNG の魅力度が高まり、市場が発展していくことに繋がれば、まさに、LNG 産消会議の目的が達成されることになると言っても良い。

なお LNG 市場が柔軟性・流動性を増す方向に変化する際、最大の課題の一つとして、LNG プロジェクトにつきものの大規模必要投資のファイナンスが可能か、という問題がある。今回、興味深いことに会議の場で、ライブで実施した電子投票では、LNG 市場の柔軟化が進んでもファイナンス問題に何らかの解を見出せるとの意見が回答の約 5 割に達した。つまり残りの 5 割はやはり長期契約の役割が欠かせないという「伝統的な回答」となったが、今後の市場変化の中で LNG 投資のファイナンス問題にも新たな解決策が模索されていくかもしれないという可能性と期待が相当存在していることが示された。

LNG 産消会議は、双方の対話を通じて、LNG 市場の健全な発展を目指すものである。LNG がエネルギーミックスの中でより大きな役割を果たすことへの高い期待を実現し、産消双方がその状況を享受し、3E に貢献する状況を作り出すため、今後とも関係者全ての叡智の結集と、市場での実際の取組み強化を続けていく必要がある。

以上